

## スピリチュアルケアと巡礼接待

### Spiritual Care and Pilgrimage Hospitality

藤沢 真理子

Mariko Fujisawa

愛知東邦大学人間健康学部

#### 要 旨

本稿は、スピリチュアルケアをシシリー・ソンドースが指摘する「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持っている価値観を尊重してケアすること」として、四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待の特徴を比較検討した。二つの巡礼地は病気や障害を持つ人たちが数多く巡礼するという共通点がある。四国遍路では弘法大師信仰を通して、ルルド巡礼では聖母信仰を通して、病や障害を治してほしいと願って巡礼している。巡礼したからと言ってすべての人が治るわけではないが、念願のルルド巡礼や四国遍路に行くことができたという喜び、そして、巡礼地で祈りを捧げることができた嬉しさ、自分よりも苦しみを抱えた他者との出会い、無事に巡礼を終えた時の達成感、そして自分が生きている意味を感じることができる時間や空間、巡礼者の価値観を尊重してくれる巡礼接待などによりスピリチュアルケアを感じている。全世界で感染拡大した新型コロナウイルスによって、二つの巡礼地はオンライン形式という新しいスタイルを取り入れながら、癒しを求める人々の願いに応えようとしている。

#### はじめに

2021年10月2日日本仏教社会福祉学会第55回学術大会シンポジウムが開催され、筆者はシンポジストの一人として招待された。大会のテーマは「仏教における休息」であり、長上深雪大会長は「『休息』は、多忙を極め、足元を見失いがちな現代社会において、非常に重要な課題です。仏教社会福祉学会において、こうした現代的課題を学術的に議論することは、現代生活のあり方を見直すことにつながり、また仏教社会福祉実践を深めるよい機会だと考えます」と休息の意義を述べた<sup>1)</sup>。シンポジウムのテーマは「仏教社会福祉実践における『休息』の意味」で、3人のシンポジストが報告した。1人目は五百井正浩真宗大谷派玉龍寺住職、2人目は富和清隆東大寺福祉事業団理事長、3人目が筆者であった。五百井住職は、災害時の寺院の役割について自分が体験した阪神淡路大震災やそれ以降の災害における寺院の支援について報告した。富和理事長は医師であり、また東大寺福祉療育病院長である。病院が支援している医療的ケア児のレスパイトケアについて報告した。そして、筆者は「休息、癒しとしての巡礼接待：四国遍路とルルド巡礼」という題で報告した。これについては『東邦学誌』第50巻第2号の「四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待」という論文を報告した<sup>2)</sup>が、さらに研究を進め、本稿ではスピリチュアルケアの視点から、2つの巡礼地、四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待の特徴を明らかにする目的をもっている。研究方法としては、文献研究、四国遍路のお接

待聞き書き調査、そして2つの巡礼の参与観察を含めた分析である。

## 第1章 スピリチュアルケア

### 第1節 トータルケアとスピリチュアルケア

トータルケアの考え方は、1967年イギリスのロンドンでセントクリストファーホスピスを創設したシシリー・ソンドースが提唱し、世界中に広がった。ソンドースは医療ソーシャルワーカーから医師になった女性であるが、彼女の愛する男性が不治の病となり、彼を介護する中で、従来の医療が治癒の見込みがなくなった患者を十分にケアしていないことを知る。そして、医師となったソンドースは最初に末期がん特有の身体的痛みを緩和する研究に取り組み、モルヒネを使って身体的苦痛を緩和する方法を開発する。しかし、身体的痛みを緩和しても患者の苦痛が治まらない症例があることに気づく。そして、死にゆく患者は、身体的痛みだけでなく、精神的、社会的、そしてスピリチュアルな苦痛を複雑に抱えており、トータルケアを提供しなければ患者の痛みを取り除くことはできないと考え、1967年イギリスのロンドンにセントクリストファーホスピスを創設した。

WHO世界保健機関はトータルケアとして、緩和ケア、パリアティブ・ケアについて「治癒を目的とした治療に反応しなくなった疾患をもつ患者に対して行われる積極的で全体的な医療ケアであり、痛みのコントロール、痛み以外の諸症状のコントロール、心理的な苦痛、社会面の問題、霊的な問題（spiritual problems）の解決が最も重要な課題となる」と定義している<sup>3)</sup>。

緩和ケア、パリアティブ・ケアは、はじめ余命が限られ治癒の見込みがなくなったがん患者の苦痛に焦点化されていた。しかし、現在では治癒の見込みがなくなる時点より前、例えばがんが診断された時点等から状況に応じて緩和ケアを提供したり、また、がんだけではなく、他の疾患、例えば呼吸器疾患の在宅緩和ケアの取り組み等も始まっている。

ソンドースが提唱したトータルケアの考え方は世界中に広がり、それぞれの国のホスピスや緩和ケア病棟は、患者の身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな苦痛を緩和することに取り組んでいる。次節では、トータルケアの中のスピリチュアルケアについて見ていきたい。

### 第2節 わかりにくいと言われるスピリチュアルケア

トータルケアの中で、最もわかりにくいと言われているのが、スピリチュアルケアである。筆者が訪問した欧米のホスピスでは、スピリチュアルケアを担当するチャプレンが常駐していた。キリスト教をベースとする国々では、もともと神父や牧師などチャプレンが病院に配置されており、ホスピスケアが始まった時にスピリチュアルケアをスムーズに提供することができた。しかし、日本の病院では一部を除き、キリスト教をベースにしている病院が少なく、チャプレンの配置はほとんどなかった。また仏教をベースとする病院がビハーラという形でホスピスケアを提供する事例もあるが、数少ない。日本でホスピスを創設したのは、1981年聖霊三方原病院に続き、1984年淀川キリスト教病院であり、いずれの病院もキリスト教を基盤にしておりチャプレンの配置が可能であった。

1980年代から1990年代の日本のがん終末期医療の状況について、梁勝則医師は日本ホスピス・在宅ケア研究会2021熊本大会で次のように語っている<sup>4)</sup>。当時の状況について、①がん患者への病名は原則非告知であった。例えば、胃がんであれば胃潰瘍、肺がんであれば肺化膿症などと言っていた。②医者は死を敗北ととらえ、取り切れる範囲で切

除手術をして、抗がん剤治療を行い、徹底した延命治療（筆者注：当時の最新医療として高カロリー輸液等）を行っていた。③緩和医療という概念が浸透しておらず、痛み等の対症療法への理解不足や否定的態度があり、がん患者の痛みは放置もしくは鎮静する傾向にあった。④死は病院で迎えるものという「常識」を市民も医療者も持っていた。⑤医師を頂点とするパターナリズムがあったと指摘する。

つまり、1980年代から1990年代における日本の医療は積極的治療を中心としており、治癒の見込みがないことや死亡は医師にとって敗北を意味し、医師は患者の痛みを緩和することにあまり関心を示していなかったと梁医師は語る。

現在の日本では、身体的な苦痛については医療の進歩が目覚ましくさまざまな身体的苦痛を取り除くための薬や治療方法が開発されている。心理的な苦痛については、一般病棟は人不足があり十分とはいえないかもしれないが、必要な場合には精神科医や臨床心理士やがん専門看護師などと連携して心理的ケアを提供できる体制が増えてきた。また、仕事や経済的な悩みなどの社会的な苦痛については、医療ソーシャルワーカーが相談にのってくれる病院が増えている。しかし、スピリチュアルな苦痛について理解が進んでいるとは言えない面がある。

葛西賢太は、WHOの健康定義とスピリチュアリティについて考察している<sup>5)</sup>。1998年1月第101回WHO執行理事会で健康定義の改正案が提出された。WHO憲章では「健康とは、肉体的に、精神的及び社会的に完全に幸福な状態であり、単に疾病や病弱がないということではない」と定義されていた。改正案はスピリチュアルが追加され、「健康とは、肉体的、精神的、霊的及び社会的に完全に幸福な動的状態であり、単に疾病や病弱がないということではない」（葛西による試訳）とされ、賛成22、反対0、棄権8で可決された。しかし、棄権した国からはスピリチュアルの定義が明確にされていない、健康定義のような基本的事項の審議にはもっと時間をかけるべきとのことで、同年6月スピリチュアリティの国際比較研究プロジェクトが立ち上げられる。この研究成果を踏まえて開かれた1999年5月WHO総会では、定義改正に至らずに事務局長預かりとなった。そして、現在も結論が出ていない。このようにWHOの経緯を見ても、スピリチュアルという言葉の理解は難しいことがわかる。

前述した日本仏教社会福祉学会シンポジウムにおいて3人のシンポジストの報告が終わった後、学会参加者との質疑応答があった。筆者に対しては、ある医師から質問があった。「スピリチュアルケアについてとても参考になった。しかし、一般病院ではスピリチュアルケアをする余裕がない。スピリチュアルケアについてもっと教えてほしい」という内容であった。

筆者は、その質問に対して、これまでのスピリチュアルケアの経緯を踏まえて、日本で先駆的にホスピスに取り組んできた淀川キリスト教病院医師の柏木哲夫の取り組みを紹介した。柏木哲夫は、スピリチュアルケアについて『『存在の意味』ではないかと思っている。したがってスピリチュアルペインといえは、自分の存在の意味が危うくなることに伴う痛みであり、スピリチュアルケアとは存在の意味がつかめるように関わり、ケアするということになる。』<sup>6)</sup>と書いている。柏木哲夫はイギリスのセントクリストファーホスピスで研修を受け、シシリー・ソンドースと親交があった。そして、1997年ソンドースが来日した時、柏木は「スピリチュアルペインとは具体的にどんな痛みを指すと思うか尋ねたところ、彼女は『存在の意味や、価値観に関する痛み』<sup>6)</sup>と答えたという。柏木哲夫はスピリチュアルケアを存在の意味と捉えていたが、ソンドースは存在の意味プラス、価値観と捉えていた。

本稿においては、スピリチュアルケアについて、ソンドースが指摘した「その人が自分の存在の意味がつかめるように、またその人が持っている価値観を尊重してケアすること」<sup>6)</sup>として分析を進める。

次節では、日本のスピリチュアルケアの現状を見ていく。

### 第3節 日本のスピリチュアルケアの現状

2022年2月現在、日本のスピリチュアルケアに関する資格として、スピリチュアルケア師と認定臨床宗教師の2つが代表的である。スピリチュアルケア師は日本スピリチュアルケア学会が認定する資格である。一方、認定臨床宗教師は、一般社団法人日本臨床宗教師会が認定する資格であり、「被災地や地域社会、あるいは医療機関や福祉施設などの公共空間で、心のケアを提供する宗教者」を指す<sup>7)</sup>。両者の違いは、スピリチュアルケア師は特定の職業の従事者や宗教者であることを求めているのに対して、認定臨床宗教師が宗教者であることを前提としている。

2021年9月12日時点で日本の認定臨床宗教師は214名であるが、地域差があり、北海道6人、東北地方27人、関東地方56人、中部地方32人、近畿地方42人、中国地方12人、四国地方5人、九州34人となっている。日本の緩和ケア病棟入院料受理施設は2021年2月1日現在383施設であり、また全国の病院と診療所の合計数（令和元年5月）は179,208カ所である<sup>8)</sup>。約18万カ所におよぶ病院と診療所のスピリチュアルケアを現在の認定臨床宗教師214人で対応することは難しい。それでは、日本の一般病院でスピリチュアルケアをどう進めていけばよいのか、次節で考えてみたい。

### 第4節 一般病院でスピリチュアルケアを提供するためにどうすればいいか

2014年6月23日付『医学界新聞』には「すべてのケアはスピリチュアルケアに通ず！」というテーマで、柏木哲夫、田村恵子、河正子、岡本拓也が対談している。以下、この対談について紹介する<sup>9)</sup>。柏木哲夫は前述したように淀川キリスト教病院の医師である。田村恵子は淀川キリスト教病院で看護師を長く勤めており、河正子は救世軍清瀬病院ホスピスで看護師の経験を持ち、岡本拓也は洞爺温泉病院ホスピスの医師である。

対談の最初に、柏木哲夫は「スピリチュアルケアは、その言葉の意味から『霊的・宗教的なもの』と誤解されている面もあるのではないのでしょうか。」と問う。田村恵子は「1989年にホスピスで働き始めたころ、当時はスピリチュアルケアというのは宗教的なケア、キリスト教的なケアという意味合いが強い、皆でスピリチュアルケアに関する英語のテキストを用いて抄読会をしていたこともありました。しかし今はスピリチュアルケアの概念も整理され、霊的・宗教的な意味だけではなくと認識されるようになってきました。」河正子は「今では、患者さんから『もう死にたい』『生きている意味がない』などの悲観的な言葉が出ると、スピリチュアルペインととらえ検討するようになってきています。」と答えている。

次に、柏木哲夫はスピリチュアルケアを特殊なケアと認識している医療者がいることを指摘し、「岡本先生は、同僚の医師に対して、スピリチュアルケアの観点をどのようにつたえていますか」と問う。岡本拓也は「患者と共にケアを作り上げていくのだという意識を持つことです。そして何より、いつも笑顔で、余裕のある安定した態度を保つこと。医師に、余裕といつも変わらぬ安定感があることは、患者・家族やスタッフにとって、とても重要なことです。」と答えている。

柏木哲夫は、田村恵子に看護師教育について尋ねる。田村は「私の大きな問いは、看護師が『スピリチュアルペインは人生の課題である』『あって当たり前』という意識をいかに持てるかということです。そうとらえたならば、誰にでも当てはまるものです。この前提を学生や新人看護師に知ってほしいですね。そして、患者さんそれぞれが持つ人生の課題にアプローチするために、相手に関心を持ってほしい。関心を持つと、必ず相手のこれまでの人生がまざまざと見えてきますから。」と答えている。

対談の最後に、柏木哲夫はソンドラスの“Death is not medical issue, but human issue.”（人が死ぬということは、医学的な出来事ではなくて人間的な出来事である）という言葉を紹介している。そして、「病院死が増えてきた現在、人が死ぬことは医学的な出来事のようにとらえられがちですが、もっと広く、ヒューマン・イシューとしてとらえる必要もあるということでしょう。スピリチュアルペインの、「ペイン」という言葉自体に何か痛みを想起させる面もあり、見失ってはいけない大切な概念を狭めてしまうように思います。その代わり『スピリチュアル・イシュー』、私の訳で言うと『魂の課題』は、ペインでなく人間誰もが持っている魂の課題ということになります。そうすると、回復可能な病気で入院している患者も、末期の患者も魂の課題を持っていると見ることができると言える。スピリチュアル・イシューに接する人は、ケアの基本を持った者として、ごく当たり前にそれぞれの課題に接していくことが出来るようになるであろうと思います。」と述べている。

日本の一般病院においてスピリチュアルケアを行うために、柏木哲夫がいうスピリチュアル・イシュー、魂の課題という視点は重要と考えられる。スピリチュアルケアを特別なものではなく、人間誰もが持っている魂の課題ととらえることですべてのケアに通じる。本稿はスピリチュアルケアの視点から四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待の特徴を明らかにする目的をもつが、柏木がいう魂の課題も含めて考察したい。

次章では、四国遍路の巡礼接待について述べたい。

## 第2章 四国遍路の巡礼接待

### 第1節 四国遍路とお接待

四国遍路はもともと辺地を巡る修行僧たちの修練の場であった。江戸時代になり、民衆が四国遍路をするようになった<sup>10)</sup>。江戸時代の巡礼動機としては、弘法大師にとりつぎを願う信仰、魂を救うための悔い改め、病氣癒し、罪滅ぼし、死者への祈り、代参などであったが、現代は、弘法大師信仰、悔い改め、病氣癒し、死者への祈りなどが動機となっている。また、自分への挑戦として定年退職者や若者が歩き遍路をしている。また、成人になるための通過儀礼として若者遍路や娘遍路の習慣もあった。

筆者は四国遍路八十八番札所大窪寺の近くで生まれ育ち、春になると遍路道をお遍路さんが歩く姿を風景の一部のように感じていた。四国の人たちは、ある日突然、今まで信仰なんてと言っていた人が四国遍路を始めることがある。定年退職を迎える夫婦などが土日などを利用して、区切り打ちと言われる方法で巡り始める。仕事人間だった人が定年退職を迎え、自分の人生はどのような意味があったのか、そして、自分に残された時間をどう生きていけばいいのか考えるようである。筆者は『東邦学誌』第50巻2号において「四国の人たちにとって四国遍路は人生の最期を迎える準備の一つではないかと考えている。例えば、Aさん（男性）はそれまで全く信仰心などない、神も仏も信じていないと言っていたが、定年退職を迎える頃に八十八カ所を巡り始め、亡くなった時にはお棺に納経帳や白衣を納めてもらっていた。Aさんの家族は『これで安心してあの世へ送ることができる』と言っていた。」と記したが<sup>11)</sup>、四国遍路は死の準備教育の意味を持っているのかもしれない。

四国では、文献で明らかなように少なくとも江戸時代から現在までお接待が続いている。筆者が行った1991年4月から8月における八十八カ所札所の定期的なお接待調査<sup>12)</sup>では、「餅・草餅」38.4%、「お菓子」32%、「みかん」25.6%、「ポケットティッシュ」17.9%、「菓子パン」16.7%、「ジュース」15.4%、「ヤクルト」15.4%、「お茶」12.8%、「お金」12.8%、「手作り巾着袋」11.5%、「うどん」10.3%、「タオル（日本タオル含む）」7.7%、「おすし」7.7%、「おにぎり」

6.4%、「ふかし芋」6.4%等がお接待されていた。また、愛媛大学教授竹川郁雄が第50番札所繁多寺で行った2014年から2018年（毎年9月）調査でも飲み物やお菓子やお金のお接待が報告されており<sup>13)</sup>、現在もお接待が継続している。

四国遍路のお接待の中で特徴的なものに善根宿がある。一般の家庭がお遍路さんに宿と食事を無料で提供することである。筆者は、亡くなった家族の命日に自宅近くの札所へ来て、お遍路さんに泊まりませんかと声をかけている人に出会ったことがある。弘法大師への信仰が厚い人にとって、善根宿は家族の命日の大切な供養となっている。また、四国遍路では次の札所まで自動車に乗せて行くという車のお接待もある。四国遍路は全長1400キロほどであり、札所は山の中や田んぼの中にある。地図上では近いようでも実際は道が複雑で迷ってしまうことがある。そのような時に道路標識は有難いものである。歩き遍路が中心であった江戸時代から道普請やへんろ道の表示などのお接待は重要なものであり、それは現在まで続いている。特に、へんろみち保存協力は歩き遍路のために道路修繕や表示設置に尽力している<sup>14)</sup>。

四国遍路でお接待される飲み物や食べ物、例えばヤクルトやミカンなどは普段の暮らしの中ではありふれた物で、決して特別な物ではない。しかし、難行苦行している四国遍路の途中に、地域の人や接待講の人たちから「お遍路さん、お接待です」と言われ、ヤクルトやミカンなどをお接待されると、とても有難く感じる。そして、お接待をいただいたお遍路さんは感謝をこめて納め札を渡す。お接待した人も有難く納め札を受け取る。両者は見知らぬ者同士だが、弘法大師信仰を通して自然に交流が生まれる。

## 第2節 白装束は死に装束なのか

現在、お遍路さんは白装束で巡ることが多い。白装束は死に装束を意味し、昔の厳しい巡礼道では巡礼はある意味で死を意識しなければならないものであったからと言われる。また、白装束は、古い自己が死に、四国遍路によって新しい自己に生まれ変わるという意味があるという指摘もある。しかし、歴史的にみると、白装束は昔からのものではない。

山川廣司は四国経済連合会調査研究論文<sup>15)</sup>の中で、江戸時代の『近世風俗志』の四国遍路に関する記述の部分の意を紹介している。「四国遍路 阿州以下四国八十八ヶ所の弘法大師に参詣するをいう（ママ）。『よそおい』には決まったものがない。もっとも病人等多し、また僧侶はいない。」つまり、江戸時代には決まった服装がなかったと指摘する。また、明治時代について「愛媛県の野忽那島宇佐八幡神社には明治期の遍路の奉納絵馬が2枚所蔵されている。その1枚は1884年（明治17）、もう1枚は1897年（明治30）のもので、17人と36人の遍路を描いているが、ともに白装束を着た人は描かれていない。」と記している。

大正時代として、筆者の『風の祈り～四国遍路とボランティア～』<sup>12)</sup> 11頁にある写真を紹介したい。大正13年4月の若者遍路の写真である。愛媛県では成人になるための通過儀礼として若者遍路が行われていた。写真では上から下まで黒装束である5人の若者が写っている。伊予の若者遍路は走って巡ることから、伊予の早回りとか伊予のカラス遍路とか言われていた。

そして、昭和時代である。山川廣司は、荒井とみ三『遍路図絵』の「遍路姿には、一定の型があつてすべての衣類は木綿に限られてゐる。その型以外の身形をしてゐるものは、一国巡りとか、春秋のお詣りさんと呼ばれる。白地の衣類に、尻敷（これは何処に腰をおろしてもよい様に考案された座布團で男は浅黄、女は紅木綿の裏と決まっていた）白手甲・白脚絆・笠を頂き、尻を端折り、金剛杖をつく。と、かう言つた白い姿そのものは、自らの修行錬磨の意味

にもなり、罪障の懺悔と近親の菩提を弔ふ巡礼の旅路にふさはしい姿である。』<sup>16)</sup>を紹介している。そして、山川はこの著書は1942年刊であるからその数年前の四国遍路の状況を反映しているのではないかと指摘している。

しかし、この頃の時代的背景を考えてみると、1938年に日本では国家総動員法が公布され、様々な物資が配給制となっている。1938年には綿糸の切符販売、1942年には衣類の切符点数制が始まり、白装束を整えるどころか遍路に出ることすら難しい時期だったのではないかと考えられる。

第二次大戦後、1953年（昭和28）から伊予鉄の四国八十八ヶ所巡拝バスが始まった。山川廣司は第1～6回目の集合写真から、乗客数、白装束の人数、乗務員数を表にしている<sup>17)</sup>。それによると、第1回1953年の乗客数は30人で、白装束は1人のみだった。第2回1954年の乗客数は29人で、7人が白装束であった。第3回1955年の乗客数は15人で、白装束は3人であった。第4回1956年の乗客数は34人で、白装束は1人のみであった。第5回1957年の乗客数は32人で、白装束は6人であった。第6回1958年には、乗客数35人のうち32人が白装束であった。山川はこの頃から白装束が定着するようになったのではないかと指摘している<sup>17)</sup>。

現在、交通事情もよくなり、四国遍路に出ることは死を覚悟するものではなくなっているが、それでも全長1400kmの行程では難儀することも多い。そのような時に、お接待を受けると、本当に身も心も温まるとお遍路さんと言う。とくに、歩き遍路にとって、四国遍路の道は厳しいものであるが、八十八ヶ所を打ち終えた時に達成感を得られる。歩き遍路はひたすら歩くことで自分を見つめなおす時間になる。出会った歩き遍路は「肉体的に疲れるが、精神的にスピリチュアル的にエネルギーチャージされた」と語っていた。

### 第3節 お接待と互酬性

筆者が八十八ヶ所すべての札所で定期的なお接待について聞き書き調査を行なった際、ある札所の住職さんから「お接待の心は相互供養である」と聞いた<sup>18)</sup>。高野山霊宝館ウェブサイトには『『胎蔵曼荼羅』に描かれている諸尊は、それぞれの存在の意義を発揮しながら、相互供養し、大日如来のこの世の全ての生命を生かす大いなる生命ならびに慈悲や智慧を分担し、衆生を救済し、悟りの世界が得られるよう衆生を導いている働きのさま』を表していると書かれている<sup>19)</sup>。四国遍路では、お遍路さんを弘法大師と同行二人ととらえ、お接待する。そしてお遍路さんはお接待してくれた人に感謝を込めて納め札を差し出す。お遍路さんとお接待する人の間で相互供養をしている。これは、目に見える互酬性と考えられる。

日本では目に見える互酬性が日常生活の中で行われている。例えば、結婚祝いに対しては内祝いを返す、葬式の香典に対しては香典返しを返すというように、他の人から何か物をもらうとお返しをするという文化がある。筆者は『日本の地域福祉』で「直接モノを贈る相手は人間だが、実際には弘法大師と同行2人である遍路を弘法大師そのものとして見る。そして、モノがお接待された時、そのお返しとして即座に納め札というモノが返される。つまりキリスト教でいう小さな者にしたことはキリストにしたことであるとするように、遍路に接待することは弘法大師にすることであるという近似点を持ちつつ、日本独特の、きわめて即物的、即自的な互酬性が保たれている。」と指摘した<sup>20)</sup>。

それではルルド巡礼ではどうだろうか。キリスト教では、即物的、即自的な互酬性をとっていない。例えば、ルルド巡礼でオスピタリテが巡礼者を手厚くもてなしたからと言って、巡礼者がオスピタリテに何かお返しをすることは無い。また四国遍路のような納め札の仕掛けもない。キリスト教では、聖書に「神を愛せよ。隣人を愛せよ」という教えが書かれており、隣人に親切な行いをする事は「天国に宝を積む」と考えられている。つまり、この世ではな

く、あの世に宝を積んでいると考えており、目に見える互酬性をとっていない点に特徴がある。

次章では、ルルドの巡礼接待について見ていきたい。

### 第3章 ルルド巡礼の巡礼接待

ルルド巡礼は、1858年貧しい少女ベルナデットの前に聖母が出現したことから始まっている。聖母が出現した洞窟では泉が湧き出ており、その水が多くの人を癒してきた。その評判からルルドに多くの人々が巡礼するようになり、新型コロナウイルス感染拡大前には年間500万人以上の巡礼者が訪れていた。ルルドでは現代医学で解明できない、難病といわれた人々が治癒された事例が報告されている。

ルルドにおいて、ルルド医学検証所が認めた「現在の科学的知識では説明できなかった治癒例」は、聖母が出現した1858年から2017年までで69件である<sup>21)</sup>。(筆者注：2018年に1件追加され70件となる)。

2015年ルルド医学検証所を訪問した森山成あきら医師は、正式に認められていた事例69件の中で50件は水と関わりがあるとする。そして、その50件のうち、8件は水を体に注いだり、つけたりした時の治癒であり、2件は水の飲用、40件は沐浴による治癒である。水以外の残りの19件のうち、8件はミサ聖祭中、3件は聖体拝領中、3件は祈りの最中、3件は病者の秘跡を受けている時と記している<sup>22)</sup>。

筆者は『東邦学誌』第50巻第2号において「カトリック教会では、信者が病気で入院したり手術を受けることになると、神父やシスターや教会の人たちがルルドの水を病室に届けてくれる。2007年、筆者がルルド巡礼をした時の巡礼団の中に病院で働くシスターが参加していた。彼女は病院や教会の人たちから頼まれて10リットル入りプラスチック容器をいくつも持参して、ルルドの水を持ち帰っていた。現在でも、ルルド巡礼は病を癒す巡礼地として信仰されている。」と報告した<sup>23)</sup>。

前述論文で書ききれなかったアレクシー・カレルについて説明する。カレルは、ノーベル生理学・医学賞を受賞した科学者である。1902年、若い医師だったカレルは、ルルドの奇跡を自分の目で確かめたいと思い、病人の巡礼団に同行した。カレルの目の前で、結核性腹膜炎で危篤状態であった女性が一瞬のうちに回復した。ルルドの聖母が出現した洞窟の前で彼女が祈りを捧げた時に、腹水で膨れ上がった腹部が見る見るうちにへこんで快癒した。カレルは驚愕する。ルルド巡礼へ旅立つ前、カレルはルルドの奇跡をヒステリーなど精神的な疾患が関連していると考えていた。巡礼により精神的に落ち着くことで治る可能性もあるだろうが、器質性の疾患が治癒することはありえないと考えていた。しかし、カレルの目の前で快癒した女性は、結核性腹膜炎、器質性の疾患を持ち、他の医師たちも危篤状態と診断していた。その彼女が何の治療もせずに、カレルの目の前で快癒した。カレルはこの時の体験を書きとめ、後に『ルルドへの旅・祈り』の一部として出版されている。この著書を日本語に訳した中村弓子は次のように指摘する。「カレルがこの手記を第一回のルルド旅行の直後に書いたらしいのに、死に至るまで発表できなかった理由はそこにあるものと思われる。」その理由とは「マリー・フェラン（筆者注：本名はマリー・バイイMarie Bailly）の治癒は、今はわかっていない別の科学的法則によって説明されるものかもしれない、という保留である。」<sup>24)</sup>カレルは科学者であり、自分の目の前で起こった出来事が何を意味するのか説明できなかった。そのため当時の科学では説明できないが、未来の科学では説明できるのではないかと考え、答えを保留したというのである。この症例について、カレルはルルド医療審査委員会で証言しているが、なぜ彼女が快癒したのか、そしてなぜ自分がその快癒の場面に立ち会ったのか、生涯、その意味を問う。

次章では、トータルケア、スピリチュアルケアという視点から四国遍路の巡礼接待を見ていきたい。

## 第4章 スピリチュアルケアという視点からみる四国遍路の巡礼接待

### 第1節 トータルケアとしての四国遍路

まず、トータルケアという視点から、四国遍路を見ていきたい。

まず、身体的ケアとしては、四国遍路では「歩く」ことが重要である。全長1200キロを歩く徒歩遍路は無論であるが、車で巡っている遍路であっても、駐車場から本堂や大師堂まで山道をかなり歩かなければならない札所もある。そのため、遍路バスツアーに参加するためにはまず足腰を鍛えておく必要があると言われている。

次に、心理的ケアである。札所や遍路道や遍路宿などで様々な人生経験をもつ人たちと出会い、話す。ある時は自分の悩みを打ち明けたり、またある時は相談を受けたりしながら、さまざまな人の人生を知ること、苦悩しているのは自分だけでないことに気づく。自分の考え方が広がり、悩みが解消したというお遍路さんに出会ったことがある。

社会的な面については、定年退職となった人たちが今までの人生をリセットして第二の人生を歩むきっかけにしたり、若者が自分へのチャレンジの機会にしている。四国遍路では定年を迎えた夫婦などが週末ごとの区切り打ちという方法で巡ることが多いが、八十八カ所を無事結願するために夫婦で次の巡拝方法などを話し合い会話が増え、夫婦の関係が円満となったという話も聞いた。

そして、スピリチュアルな面である。四国遍路は仏教巡礼の一つであり、遍路自体が宗教的、スピリチュアルな行為と言える。また、四国遍路は「お四国病院」と言われ、身体や心の病や障害をもつお遍路さんを長く癒してきた歴史をもつ。

次節では、四国遍路においてどのような癒しがあったのか、見ていきたい。

### 第2節 四国遍路と癒し

四国遍路は八十八カ所の札所、寺院から成る。八十八カ所の宗派は、真言宗80カ所、臨済宗2カ所、曹洞宗1カ所、天台宗3カ所、真言律宗1カ所、時宗1カ所である。

本節では、四国八十八カ所霊場会ウェブサイトに掲載されている「癒し」に関する記事を分析する<sup>25)</sup>。八十八カ所の札所の中で「癒し」に関する記事が13カ所、「霊水」9カ所、「安産・子宝」7カ所、「その他」2カ所あった。

まず「癒し」13カ所である。第6番札所の安楽寺では、脊椎カリエスの男性が治ったことが書かれている。第16番札所の観音寺では、大正2年頃盲目の高松伊之助が治った。第22番札所の平等寺では、大正時代に土佐出身の林之助が杖で歩くことができるようになり、それまで使っていた箱車を平等寺に奉納した。第27番札所の神峰寺では、昭和30年代に愛知県水谷しづの脊椎カリエスが治った。第28番札所の大日寺では、首から上の病に効く爪彫薬師について書かれている。第33番札所の雪隠寺では、ある男性が失明に近い眼病だったが、裸足で7回目の遍路をして救われ、そしてこの寺の和尚になったことが書かれている。第40番札所の観自在寺では、平城天皇の病氣平癒のために弘法大師が祈祷した。第44番札所の大宝寺では、後白河法皇の脳の病が平癒した。第46番札所の浄瑠璃寺では、室町時代足利幕府武将の平岡道侍が本尊により病が治った。第47番札所の八坂寺では、「救い手」というものがあり、それにより足や目の病気に効くことが書かれている。第57番札所の栄福寺では、足の不自由な15歳の少年が治り、箱車が奉納された。第60番札所の横峰寺では、行基が桓武天皇の脳病を平癒した。第65番札所の三角寺では、いぼや魚の目が治

ること、そして第77番札所の道隆寺では、眼病に効くという眼なおし薬師について書かれている。

次に「霊水」9カ所についてである。第3番札所の金泉寺では、長寿の霊水について書かれている。第6番札所の安楽寺では、万病を治す温泉が湧いている。第17番札所の井戸寺では、井戸に姿が写ったら無病息災ということが書かれている。第22番札所の平等寺では、弘法の霊水が湧いており、万病に効く。第23番札所の薬王寺では、ラジウムを含む霊水が湧いており、肺の病気に効く。第27番札所の神峰寺では、病氣平癒の岩清水のことが書かれている。第28番札所の大日寺では、大師加持水が湧いている。第39番札所の延光寺では、目洗い井戸があり、眼病に効く宝医水について書かれている。第58番札所の仙遊寺では、お加持の井戸があり病に効果がある。

「安産・子宝」7カ所は、第30番札所善楽寺、第34番種間寺、第65番札所三角寺、第61番札所香園寺、第62番札所宝寿寺、第76番金倉寺、第84番札所屋島寺である。

「その他」2カ所は、第14番札所の常楽寺には児童養護施設が併設されており、そして第86番札所の志度寺は志度寺診療所や老人保健施設を運営している<sup>26)</sup>。

次節では、四国遍路の巡礼接待とスピリチュアルケアについて見ていきたい。

### 第3節 四国遍路の巡礼接待とスピリチュアルケア

前述した、日本のホスピスケアの先駆者である柏木哲夫は、スピリチュアルケアを何とか日本語にできないかと考えた。「霊的ケア、魂のケア、実存的ケア、宗教的ケア・・・いずれもぴったりにこない。スピリチュアルという言葉が持っている深さと広がりをも的確に表す日本語が存在しないのである。それで、今では、スピリチュアルという言葉をも、あえて翻訳しないで、そのまま用いようとする傾向にある。」という<sup>27)</sup>。

本節では、前述したソングースのスピリチュアルケアの定義「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持っている価値観を尊重してケアする」という視点から、四国遍路の巡礼接待を見たい。

四国遍路では、お遍路さんが地域住民や接待講の人からお接待を受けながら、難儀する巡礼を続けている。四国という大きな自然の中で、お遍路さんは八十八カ所を巡り、自分の生きている意味を問い、そしてお遍路さんそれぞれが持っている価値観を尊重してくれるような巡礼接待が行われている。

浅川泰宏は一人の女性遍路を紹介している<sup>28)</sup>。彼女は徳島県に住んでいたが、30代の息子が突然余命6ヶ月の重病と宣告される。彼女は自分の祖父が病気を患った時、四国遍路をして元気になった話を思い出す。そして夫とともに四国遍路を始める。浅川泰宏は、彼女の変化を4段階にまとめている。第0段階は絶対的な苦しみであり、彼女は「真面目に生きてきた自分やが、なぜこんなにも辛い思いを」という。第1段階は苦しみの相対化である。彼女は若い女性遍路に出会い、「自分やよりも辛い人もおるわなあ」と感じる。そして、苦しんでいるのは自分だけでなく、同じように苦しむ他者の存在に気づく。第2段階は見舞いとしての接待である。彼女は「やっぱりお接待、いろいろして頂かって、助けてもらうんやな」と思うだけでなく、遍路がほかの遍路にお接待することを学ぶ。そして、第3段階は響振する「苦しみ」である。彼女は二十歳位の娘遍路に出会い、「ほの子も、だいぶん何か持っとなかなという気がして」お金をお接待する。すると、娘遍路は泣きだす。「やっぱり、若い娘さんがまわって難しいわな。(彼女に)何があったんかとまではよう聞かん。私やも何があったんかとかは、誰にもいわんとまわっとったから。」浅川泰宏はこれを「感情の『響き』、あるいは『振動』という当事者の体感的なニュアンスを込めた『響振』という造語で表現してみたい」と記す<sup>28)</sup>。この事例からは、四国遍路の「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持つ

ている価値観を尊重した」巡礼接待の実態が理解できる。

同じような時期に起源をもつ西国三十三カ所では、過去にはお接待の風習があったようだが、現在は見られない。しかし、四国遍路では現在も手厚いお接待が継続している。それは弘法大師への信仰が基盤となっているのは間違いないが、難儀しているお遍路さんを支えたいという地域住民の気持ちがある。しかし、一方、善意だけといえない史実もある。例えば、江戸時代の土佐では遍路禁止令が出ていたり、明治から大正時代に流行したコレラでは遍路取締りがあった<sup>29)</sup>。そのような時期を経ても、四国では文献で明らかとなっている江戸時代から現在までお接待が継続している。

四国遍路の巡礼接待の癒しとしては、お接待を通して、人のあたたかさを地域住民や接待講やお接待する個人や札所の寺院などから受け取る。また、札所で読経し納め札を納めたり、納経帳に御朱印を受け取る等によって、一歩ずつ前進む仕掛けがある。ハード面では、四国の広大な山や川や海、そして美しい緑、新鮮な空気などによって遍路たちを癒してきた。そして、温かい食事や寝床を提供する宿坊や遍路宿、札所をつなぐ遍路道、そして無料で遍路を宿泊させる善根宿等もお遍路さんを支えている。

本稿では、スピリチュアルケアについてソンダースが指摘する「その人の存在の意味や価値観を尊重するケア」として、四国遍路の巡礼接待を分析してきた。四国遍路の巡礼接待にはお遍路さんの存在の意味や価値観を尊重する仕組みがあり、お遍路さんは四国遍路を通して自分が生きる意味を見つめ直す時間を過ごし、また自分の価値観を尊重してくれる空間を経験していると考えられる。

#### 第4節 なぜ四国遍路はお四国病院と言われるのか

四国遍路は「お四国病院」と言われる。それは、歴史的に病や障害をもつ人が多く巡拝し、また前述したように四国八十八カ所霊場会ウェブサイトにも多くの癒しの事例が記されている。また、実際に四国遍路を巡ってみると、遍路道沿いに自分の病気や障害が治ったことを書いている石碑や木製の碑文などを数多く見る。

厚生労働省は2020年の日本人の平均寿命を男性81.64歳、女性87.74歳と発表し、過去最高を更新している。民衆が四国遍路を始めるようになった江戸時代の平均寿命は30代半ばと言われ、平均寿命は2倍以上となっている<sup>30)</sup>。また、江戸時代にはまだ西洋医学が日本に導入されておらず、鍼や漢方薬などの東洋医学のみであった。治る見込みがなくなった病や障害をもった人々は、最後の願いを弘法大師に託して、四国を巡った。現在でも、医師から治らないと宣告された病人や障害を持つ人が四国遍路を巡っている。また、前述した浅川泰宏が紹介した女性遍路のように、愛する家族、息子が余命6カ月と宣告された人もいる。この女性遍路は八十八カ所を巡礼して必死に祈ったが、息子は約半年後に亡くなった。しかし、「彼女が巡礼を振り返って語るのは祈りが叶えられなかったことに対する失望ではありません。むしろ、『でもやっぱり、行ったら自分やが助けてもうたんな』という感謝の言葉です。そして、『それはお接待のことですか』と尋ねる筆者（注：浅川泰宏）に、黒田さんは『うーん、ほれだけではないねえ・・・』と述べ、やや間をおいた後、『ああ、自分やよりももっと・・・苦しい思いしよう人もあるんやなというんも見えたし・・・』と、声をつまらせながら答えた<sup>31)</sup>という。

イギリスのシシリー・ソンダースはセント・クリストファーホスピスを創設した時に、ホスピスは死を待つ場所ではなく、最後までその人らしい生き方ができるように支援する場所と考えた。四国遍路においても、治らない病や障害を抱えているお遍路さんにとって、八十八カ所の札所を巡りながら、自分らしい生き方とは何か、生きるとは何か、

自分に問うている。四国という大自然の中でお遍路さんは自然のエネルギーを感じながら歩いている。札所で弘法大師へ祈りをささげ、時には地域の人や接待講の人たちからお接待を受けながら、自分の存在の意味や自分の価値観を自分に問いながら巡礼している。お遍路さんは魂の課題にチャレンジしている人といえる。

次節では、新型コロナウイルス感染が拡大している現在、四国遍路の現状はどうなっているのか報告したい。

## 第5節 新型コロナウイルス対策と四国遍路

2020年初頭から日本だけでなく、世界中で新型コロナウイルス感染が拡大して、四国遍路の札所も閉鎖する事態となった。そのため、実際に四国遍路をすることができないが、オンラインで四国遍路を体感できるような工夫がされている。

2021年10月1日時点における八十八カ所霊場会ウェブサイトで紹介されている各札所のウェブサイトとフェイスブックとツイッターとインスタグラムを分析した<sup>32)</sup>。徳島県23カ所のうち、ウェブサイトをもっている寺院は8カ所(34.8%)、フェイスブック4カ所(17.4%)、ツイッター1カ所(4.4%)、インスタグラム2カ所(8.7%)であった。高知県16カ所のうち、ウェブサイトをもっている寺院は4カ所(25.0%)、フェイスブック1カ所(6.3%)、ツイッター0カ所(0%)、インスタグラム1カ所(6.3%)であった。愛媛県26カ所のうち、ウェブサイトをもっている寺院は6カ所(23.1%)、フェイスブック1カ所(3.9%)、ツイッター0カ所(0%)、インスタグラム2カ所(7.7%)であった。香川県23カ所のうち、ウェブサイトをもっている寺院は13カ所(56.5%)であり、4県の中で最も多い割合であった。フェイスブックは2カ所(8.7%)、ツイッター1カ所(4.4%)、インスタグラム3カ所(13.0%)であった。香川県は弘法大師誕生の地である善通寺があり、筆者が行ったお接待の聞き書き調査でも定期的なお接待の割合が最も高かった。

四国八十八カ所の全体では、ウェブサイトをもっている寺院は31カ所(35.2%)、フェイスブック8カ所(9.1%)、ツイッター2カ所(2.3%)、インスタグラム8カ所(9.1%)であった。新型コロナウイルス感染拡大の前からインターネットやこれらのSNSを活用していた寺院もあるが、やはりコロナの影響で実際の巡礼に行くことが難しいため、より充実したウェブサイトを工夫したり、SNSを活用したり、寺院の情報を積極的に発信するようになっている。オンラインでスピリチュアルケアをどれだけ感じる事が出来るのかは今後の検証が必要と思われるが、新型コロナウイルス感染が収束した後も、病気や障害、仕事や家事や育児や介護などの理由で実際に四国遍路をすることが出来ない人たちにあってオンライン巡礼は有用なツールになると考えられる。

次章では、ルルド巡礼をスピリチュアルケアという視点から見ていきたい。

## 第5章 スピリチュアルケアという視点からみるルルド巡礼接待

### 第1節 キリスト教巡礼としてのルルド巡礼

ルルド巡礼はキリスト教巡礼地の一つである。2022年1月2日東京都麹町カトリック教会ミサの説教において酒井陽介神父はキリスト教巡礼の特徴を三つ語る<sup>33)</sup>。

第一は、巡礼はどんな困難なことがあっても、自分の人生にとってかけがえのない神に導かれ、神を拝むことである。「巡礼とは主の霊に導かれ、主に向かって旅することにほかなりません。ですから巡礼のエッセンスというのは、万難を排して、自分の人生にとってかけがえのない神に招かれ、神を拝む、非常にシンプルなことなんですよね。」

第二は、巡礼は遠い場所へ行かなくても日常生活で出来る。筆者は大学時代から巡礼研究を続けているが、大学の恩師であるシスターから「遠い場所へ巡礼に行かなくても黙想すると主に会えますよ」と言われたことがある。酒井神父も「遠いところに赴くことだけが巡礼ではありません。(中略)例えばわたしたちも、教会の(筆者注：麹町カトリック教会の敷地内にある)ルルドの聖母のところに行ってお祈りする。この聖堂の中であれば、マリア様はそこにいらっしゃいますよね、庭にもいらっしゃいます。聖櫃の中のイエスと語り合う。更には、精一杯の捧げ物を分かち合うならば、家庭の中でも、仕事場へ行くことも、育児や介護も、そこにいるイエスと出会うことができるならば、そこにいるイエスを見つけたいと思うならば、そして、自分の囚われから一歩出ることができるならば、立派な日常の巡礼になると思います。」と話す。

第三は、巡礼は個人的であると同時に集団的なものとする。「羊飼いたちは仲間を連れ立っての幼子イエスへの巡礼をしました。賢者も1人で来たわけではありません。連れ立つ仲間、寄り添って歩くとも、そんな仲間がやっぱり必要なんです。」「わたしたちは一緒に巡礼に出ているんです。それぞれのペースを守りながら、皆が気遣いながら、支え合いながら。でもわたしたちが同じ方向を見つめて歩んでいるということ、どうか忘れないようにしましょう。一緒に歩いていく、共に歩いていく。その目的はみんなでキリストに出会うためであり、みんなでキリストを発見するために行くんだ、皆でキリストを迎えるんだ、みんなでキリストを伝えるんだ。このことがわたしたちに今、求められている巡礼の形であると思います。』<sup>33)</sup>と酒井神父は語る。

ルルド巡礼者においても、どんな困難なことがあっても、自分の人生にとってかけがえのない神に導かれ、神を拝むことを求めている。次節では、ルルド巡礼の癒しについて見ていきたい。

## 第2節 ルルド巡礼の癒し

本節では、2022年1月時点のルルド聖域ウェブサイトに掲載されているルルド医学検証所で認定された70人を分析する<sup>34)</sup>。

まず、70人を出身国で分析すると、最も多いのはフランス58人、82.9%となっている。次に多いのがイタリア8人、11.4%である。イタリアの特徴としては近年認定された人が多い。ほかの国としては、アルジェリア1人、オーストリア1人、スイス1人、ドイツ1人でそれぞれ1.4%であった。

次に属性である。シスターが12人で、17.1%を占める。神父や牧師は3人で、4.3%である。それ以外の一般の人が55人、78.6%と最も多い割合である。

次に認定された年である。70件の事例のうち、最も初期に認定されたのは1862年である。1858年少女ベルナデットの前に聖母が出現してから4年後である。その年に認定されたのは7人、10.0%である。そして、認定された年として最も多いのは1908年で、20人28.6%である。1910年と1912年にそれぞれ4人、5.7%が認定されている。1952年と1955年と1956年と1958年と1960年と1965年は2人、2.9%が認定されている。このように、認定は毎年されているわけではない。

特に、注目すべき点は、1913年から1946年までの33年間はまったく認定がないことである。この時期は、1914年から1917年まで第一次世界大戦、1941年から1945年まで第二次世界大戦が起こっており、ルルド巡礼は難しかったと考えられる。

また、第一次世界大戦中の1918年に始まったスペイン風邪の影響も考えられる。スペイン風邪とは「1918(大正7)

年から 1921（大正10）年にかけて世界を覆いつくしたインフルエンザ（流行性感冒）の大流行である。世界中で当時の人口の4分の1程度に相当する5億人が感染したとされ、死者数は1,700万人から5,000万人との推計がある<sup>35)</sup>。スペイン風邪が流行した時代には、ウイルスという概念も抗生物質もワクチンもなく、国立感染症研究所感染症情報センターは「インフルエンザウイルスが始めて分離されるのは、1933年まで待たねばならなかったわけです。このような医学的な手段がなかったため、対策は、患者の隔離、接触者の行動制限、個人衛生、消毒と集会の延期といったありきたりの方法に頼るしかありませんでした。」と指摘している<sup>36)</sup>。

ルルドで認定がなかった1913年から1946年までは戦争や感染症が続いたことが影響したと考えられる。そして、2020年から2022年現在まで、世界は新型コロナウイルスという新たな感染症に襲われている。新型コロナウイルス対策とルルド巡礼については後述する。

### 第3節 ルルド巡礼におけるスピリチュアルケア

前述したアレクシー・カレルは幼い頃にキリスト教の洗礼を受けていたが、1902年ルルド巡礼団医師として参加した頃は熱心な信者ではなく、むしろ科学者として教会の教えに疑問をもつこともあった。そのため、自分の目の前で起こった奇跡を信仰で受け止めることはできなかった。

本節では、カレル側からではなく、快癒した結核性腹膜炎の女性側から見ていきたい。彼女の本名はMarie Bailly（マリー・バイイ）という<sup>37)</sup>。彼女は幼い頃から結核と闘い続ける人生であった。そして貧しかった彼女の両親も次々と結核で亡くなっていた。彼女は病に侵された自分の生きる意味を知りたかったのであろう。例え死んでもよいのでルルド巡礼へ行きたいと願った。そして、念願のルルド巡礼へ旅立った。しかし、ルルドへ向かう途中、彼女の症状は悪化するばかりだった。ようやく目的地のルルドへ到着しても、彼女は息をするのもやっとの重体であった。そして、そのような重体であっても、巡礼団の仲間やルルドのオスピタリテの力を借りて、ミサに参加し、ルルドの泉で沐浴した。まさしく彼女が願っていた、彼女の価値観を尊重したケアがルルドで提供された。そして聖母出現の洞窟の前でストレッチャーに寝たまま祈りをささげていた時に突然、快癒は起こった。

ルルドへ行く汽車の中で、カレルは巡礼団長と話した。『回復を希望してこの長い旅行の苦しみにも耐えたのに、希望が裏切られた人たちは、絶望と疲労のために、死んでしまうでしょうね。』『ドクター、あなたは信仰を考えに入れていらっしゃるよ。治らなかった者も慰めを得て帰って来ますし、死ぬ場合にも、やはり喜びで一杯ですよ。』<sup>38)</sup>

カレルは、病人たちのルルドの目標は病気を治してもらうことだと考えていたが、巡礼を願う病人たちはルルドへ行き、そこで祈りをささげることに意味があった。そして、聖母が出現した時に貧しい一人の少女バルナデットを一人の人間として大切に接したことになり、現在のルルドでもボランティアやオスピタリテたちが巡礼者を一人の人間として大切にしている。マリー・バイイもルルド巡礼で自分の生きている意味を問い、自分の価値観を尊重してくれるスピリチュアルケアを体験した一人であった。

### 第4節 ルルド巡礼とホスピスケア

ノートルダム清心女子大学の須沢かおりは、ルルドの聖母オスピタリテ会員として巡礼者の支援に携わり、ルルド関係の複数の論文を書き上げた後、ドイツで死去した。癌を患った彼女にとってルルドでの支援活動や研究は自分の

生きている意味を問う時間だったのではないかと考えられる。

須沢かおりはルルド巡礼とホスピスケアについて「現代のホスピス運動によって手の届かないもの、また人生の終末期を過ごす施設としての一般的なホスピスでは得られないものが、ルルドにはあるのではないだろうか。」<sup>39)</sup>と指摘している。

ルルドに聖母が出現した19世紀後半、不治の病をかかえ、治癒を願う人々がルルドへ押し寄せた。現在、世界の多くの国では人々は病を抱えながらも死までの長い時間を過ごす。須沢かおりは「ルルドは現代のホスピスがなしえなかったもの、ホスピスを超えるものを問いかけ、求め続けている。ルルドの医療施設においては、積極的な治療は一切行われぬ。傷病者は常備薬を持参するが、ルルドの傷病者施設では点滴や注射さえ全くされない。医師と看護師は24時間待機しているが、患者の容態が悪化しても、積極的な治療は一切行われぬのである。筆者（注：須沢かおり）が聞いた話であるが、ルルドに滞在する病者の数とその重症度からすれば、ルルドでの死者の数は圧倒的に少ないという。それはルルドに滞在することが傷病者にとって、精神的な高揚と安らぎを与えることにも影響していると思われる。」「ホスピスの歴史はヨーロッパ中世においては宗教的な要素と結びついて発展しており、近代になってホスピスを創設したソンダースも熱心なキリスト教徒であったことから、キリスト教的な実践との関連をもっていた。ホスピスは余命を過ごす姥捨山のようなところではなく、また死にゆく場所でもなく、最後まで充実した生を送ること、生の質を高めるために赴く場所である。ここに、ルルドと現代のホスピスの接点があると思われる。」<sup>40)</sup>と記している。

須沢かおりは、ルルド巡礼接待において、ソンダースが指摘するスピリチュアルケア、「その人が自分の存在の意味がつかめるように、そしてその人が持っている価値観を尊重してケアしている」ことを実感していた一人である。

## 第5節 新型コロナウイルス対策とルルド巡礼

四国遍路もそうであったが、2020年から2022年現在まで世界中で感染拡大している新型コロナウイルスによってルルドも大きな影響を受けた。とくに、ルルド巡礼者の多くは病気や障害をもっており、感染リスクが高い。そこで、24時間ライブ配信や360度カメラを利用したバーチャルリアリティー配信、またSNSとしてフェイスブックやツイッターやインスタグラムなどが活用されている。

2020年3月から2か月間完全にルルド聖域は閉鎖され、5月16日に再開したが、2020年の1年間は巡礼団を受け付けず個人巡礼に限定していた。そのため、世界中のルルド巡礼を待ち望む人の声に応えるために、2020年7月16日に“*Lourdes United*”が開催された。1858年7月16日少女ベルナデットの前に聖母が出現した最後の日を記念して、2020年7月16日朝から夜まで一日中オンライン巡礼が開催された<sup>41)</sup>。

ルルドの位置するフランスでは感染拡大が何度も起こり、2021年も収束していなかった。ワクチン接種が徐々に進み人々の社会活動は少しずつ戻り始めていたが、まだ安心できる状況ではなかった。そこで、2021年7月16日もオンライン巡礼“*Lourdes United*”が開催された<sup>42)</sup>。朝7時から夜10時30分まで全世界の人々が共に祈りをささげた。2021年7月15日時点のフランスの新型コロナウイルス感染者数は10,781人であり、日本は3,418人であった<sup>43)</sup>。その頃、ヨーロッパは日本と比較してワクチン接種が進んでおり、“*Lourdes United 2021*”の映像を見ると、2020年と比較するとより多くの人が参加しているようだった。

2020年も2021年もルルド聖域内の地面には白い丸が描かれ、ソーシャルディスタンスを保つようになっていた。例

年であれば、ルルドには車いすやストレッチャーの人たちがあふれている。筆者がルルド巡礼をした時にも、どこからこんなに多くの車いすやストレッチャーの人が集まってきたのだろうかと思うほど、病人や障害をもつ人が巡礼していた。しかし、2020年と2021年のオンライン巡礼“*Lourdes United*”ではそのような人は少なかった。感染リスクが高い病人や障害を持つ人たちにとって対面参加は難しく、オンライン巡礼という方法は有難いものとなっていた。

実際にルルドを巡礼することが出来れば、ルルドの癒しとして、ピレネー山脈からの風、ポー川のほとりで休憩した時の緑の木々、聖母が出現した洞窟に湧き出る泉の水、そして沐浴、何万人もが参加するミサやローソク行列、またボランティアやオスピタリテたちと触れ合いなどを体感できる。残念ながら、オンライン巡礼では自然の緑や風や水、そしてボランティアやオスピタリテとの触れあいを直接感じることはできないが、2020年と2021年の“*Lourdes United*”では、オンラインであっても世界中の人が祈り、一体となることを感じることができるよう工夫されていた。

## まとめ

本稿は、スピリチュアルケアについて、ソンドースが指摘する「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持っている価値観を尊重してケアすること」として、四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待の特徴を比較検討してきた。

医療現場におけるホスピスケアや緩和ケアではボランティア参加も見られるが、その中心は医師や看護師など専門職が患者に対して行うケアである。そして、スピリチュアルケアについては新しくスピリチュアルケア師や臨床宗教師等が認定され、医療現場で活躍している。しかし、まだ養成数が少なく一般病院や診療所まで配置される状況にない。

本稿で述べてきた四国遍路やルルド巡礼では、専門職でなく、四国遍路であれば地域住民や接待講の人たち、そしてルルド巡礼ではオスピタリテやボランティアたちが中心になって、巡礼接待を行っている。近藤裕は、2003年日野原重明聖路加病院長を団長とするスピリチュアルケア・ツアーの一員としてルルドを訪問した時、日本人ボランティア女性が「病める人たちをケアすることで、自分もなにかスピリチュアル・ケアを受けているような気がします」と語るのを聞く。そして、近藤裕はルルドとは「“傷ついた癒し人”たちのコミュニティ」と指摘する<sup>44)</sup>。四国遍路においても、浅川泰宏が紹介していた女性遍路<sup>28)</sup>のように自分の息子が余命宣告され四国遍路を始め、その道中で多くの傷ついた人たちに出会い、苦しいのは自分だけではないことに気づき、ほかの遍路たちへ巡礼接待を始めた人がいる。まさしく“傷ついた癒し人”である。ルルド巡礼や四国遍路では、地域住民やボランティアや巡礼者たちが、相互に「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持っている価値観を尊重してケアすること」を自然に行っている空間と考えられる。

ルルド巡礼も四国遍路も病気や障害を持つ人たちが数多く巡礼するという共通点がある。四国遍路では弘法大師信仰を通して、ルルド巡礼では聖母信仰を通して、病や障害を治してほしいと願って巡礼している。しかし、巡礼したからと言って、すべての人が治るわけではない。前述した女性遍路は八十八カ所を巡り懸命に祈ったが、最愛の息子は死んでしまった。しかし、彼女は失望ではなく、遍路に出た事で「自分やが助けてもうたんな」と感謝の言葉をいう<sup>28)</sup>。それは、様々な苦難を抱えるお遍路さんと出会い、意識の底で響きあうような共感体験をして、自分が助けてもらったと感じたからである。また、ルルド巡礼では、アレクシー・カレルが巡礼団長に言われたように、「ドクター、

あなたは信仰を考えに入れていらっしゃいませんよ。治らなかった者も慰めを得て帰って来ますし、死ぬ場合にも、やはり喜びで一杯ですよ。」カレルは最初、病人たちのルルドの目標は病気を治してもらうことだと考えていたが、巡礼を願う病人たちはルルドへ行き、そこで祈りをささげることの意味があった。そこでは、聖母が貧しい少女ベルナデットを一人の人間として大切に接したことになり、世界中から集まったボランティアやオスピタリテたちが病気や障害をもつ巡礼者たちを温かくもてなしていた。マリー・バイイもそのようなルルド巡礼において癒された一人であった。

2つの巡礼地とも巡礼したからと言ってすべての人が治るわけではないが、念願のルルド巡礼、念願の四国遍路に行くことができたという喜び、そして、巡礼地で祈りを捧げることができた嬉しさ、自分よりも苦しみを抱えた他者との出会い、無事に巡礼を終えた時の達成感、そして自分が生きている意味を感じることができる時間や空間、巡礼者の価値観を尊重してくれる巡礼接待などにより自分の生きている意味を感じている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、四国遍路もルルド巡礼も、巡礼したいがなかなか巡礼することが難しい状況であるが、オンラインを最大限に活用している。両者は四国遍路の場合は弘法大師信仰、ルルド巡礼の場合は聖母信仰という違いはあるが、共通して「巡礼したい」「祈りを捧げたい」という人々の気持ちに応えようとしている巡礼地である。四国遍路やルルド巡礼は、その時代の医学では治癒が難しい病気や障害を、弘法大師や聖母にとりつぎを願うことで「治るかもしれない」「癒してもらえないかもしれない」という民衆の願いの場であり、筆者が幼い頃に見た数多くの札所に奉納されていたギブスや松葉杖は人々の願いを象徴したものであった。時代とともに病気や障害は変化していくが、人々の祈りは続いている。全世界で感染拡大した新型コロナウイルスによって、2つの巡礼地はオンライン形式という新しいスタイルを取り入れながら、癒しを求める人々の願いに応えようとしている。

2021年度日本仏教社会福祉学会第55回学術大会シンポジウムにて報告が本研究を進めるきっかけとなったことに心より感謝したい。

#### 引用文献

- 1) 日本仏教社会福祉学会第55回学術大会実行委員会編『日本仏教社会福祉学会 第55回学術大会 大会要項・発表要旨集』日本仏教社会福祉学会、2021年、1頁。
- 2) 藤沢真理子「四国遍路とルルド巡礼の巡礼接待」『東邦学誌』第50巻第2号、2021年、23-35頁。
- 3) WHO 'Cancer pain relief and palliative care' "World Health Organization Technical Report Series 804", 1990, p.11. 世界保健機関編、武田文数訳『がんの痛みからの解放とバリアティブ・ケア』金原出版、1993年、5頁。
- 4) 梁勝則「日本ホスピス在宅ケア研究会27年のあゆみ」日本ホスピス・在宅ケア研究会2021熊本大会「日本ホスピス・在宅ケア研究会の歴史とこれから 2021」オンライン期間限定配信、<https://www.youtube.com/watch?v=HyZFESxPe0E>、2022年2月14日検索。
- 5) 葛西賢太『「スピリチュアリティ」を使う人々—普及の試みと標準化の試みをめぐって』湯浅泰雄監修『スピリチュアリティの現在—宗教・倫理・心理の観点』人文書院、2003年、146-150頁。
- 6) 柏木哲夫「生と死の医学」『総合臨床』第56巻第9号、2007年、2748頁。
- 7) 上智大学ウェブサイト、2022年2月2日検索。

<https://www.sophia.ac.jp/jpn/otherprograms/griefcare/kouza/shikaku3.html#:~:text=%E3%80%8C%E8%87%A8%E5%B>

A%8A%E5%AE%97%E6%95%99%E5%B8%AB%E3%80%8D%E3%81%AF%E3%80%81,%E3%81%8C%E8%AA%8D%E5%AE%9A%E3%81%99%E3%82%8B%E8%B3%87%E6%A0%BC%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82&text=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%82%B9%E3%83%94%E3%83%AA%E3%83%81%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%82%B1%E3%82%A2%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E3%81%8C,%E3%81%82%E3%82%8B%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%8C%E5%89%8D%E6%8F%90%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82。

- 8) 日本の認定宗教臨床師の数(2021年9月12日時点)は、日本宗教臨床師会ウェブサイト参照している。2022年3月2日検索。<http://sicj.or.jp/uploads/2017/11/0d79dfd893dee4df25675c09c6df34ba.pdf>。  
また、日本ホスピス緩和ケア協会ウェブサイトによると、2021年2月1日現在の緩和ケア病棟入院料届出受理施設数は383施設である。2022年2月14日検索。<https://www.hpcj.org/list/relist.php>。  
そして、病院・診療所の統計は、厚生労働省ウェブサイト、2022年2月2日検索。  
[https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/m19/dl/is1905\\_01.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/m19/dl/is1905_01.pdf)。
- 9) 『医学界新聞』2014年6月23日。  
[https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2014/PA03081\\_01](https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2014/PA03081_01)。
- 10) 頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川学芸出版、平成21年、204頁。
- 11) 藤沢真理子、前掲論文、2021年、25頁。
- 12) 藤沢真理子『風の祈り～四国遍路とボランティアリズム～』創風社出版、1997、98～103頁。若者遍路の写真については、11頁。
- 13) 竹川郁雄「四国遍路における現代の『お接待』—四国遍路巡拝記における『お接待』の諸相」『四国遍路と世界の巡礼』35第5号、2021年4月、32頁。
- 14) へんろみち保存協力会ウェブサイト、<http://blog.iyohenro.jp/>、2021年9月20日検索。
- 15) 山川廣司「四国遍路の魅力～人はなぜ遍路に出るのか～」8頁、平成24年3月、四国経済連合会WEBサイト<https://yonkeiren.jp/shikokugaku-yamakawa.pdf>、2022年1月19日検索。
- 16) 山川廣司、前掲論文、9頁。
- 17) 山川廣司、前掲論文、10頁。また、当時の写真が伊予鉄ウェブサイトの「四国八十八カ所今昔」<http://www.iyotetsu.co.jp/sp/information/column/?p=shikoku88>や「四国八十八カ所巡拝バスのご案内」2022年2月15日検索。  
<https://www.iyotetsu.co.jp/sp/bus/kashikiri/junpai.html>。
- 18) 藤沢真理子、前掲書、97～98頁。
- 19) 高野山霊宝館ウェブサイト、2022年2月15日検索。  
<http://www.reihokan.or.jp/syuzohin/hotoke/mandara/ryobu.html>。
- 20) 藤沢真理子「ボランティアリズムの互酬性」『日本の地域福祉』第12巻、1998年、41頁。
- 21) 森山成あきら「聖地ルルドの医学検証所と患者受け入れ病院を訪ねて」『臨床精神医学』45(8)、2016年、1080～1083頁。
- 22) 森山成あきら、前掲論文、1081頁。
- 23) 藤沢真理子、前掲論文、2021年、26頁。
- 24) アレクシー・カレル『ルルドへの旅・祈り』春秋社、1983年、189-190頁。カレルの目の前で快癒した結核性腹膜炎の女性は、本の中ではマリー・フェランという名前であるが、本名はMarie Baillyである。本の記者である中村弓子が「バイイ」と表記しているため、本稿でもマリー・バイイと統一している。
- 25) 四国八十八カ所霊場会ウェブサイト、2022年1月9日検索。  
<https://88shikokuhenro.jp/>。
- 26) 志度寺診療所、<https://potara.jp/>、2022年2月2日検索。
- 27) 柏木哲夫、前掲論文、2748頁。
- 28) 浅川泰宏『四国遍路文化論—接待の創造力』かわさき市民アカデミー出版部、2008年、55-67頁。
- 29) 頼富本宏、前掲書、216-219頁や中川未来「感染症をめぐる差別の歴史的構造」『中外日報』2021年3月8日付け。

- <https://www.chugainippoh.co.jp/article/ron-kikou/ron/20210219-001.html>。
- 30) 2020年の平均寿命は毎日新聞2021年7月30日付を参照。2022年1月9日検索。  
<https://mainichi.jp/articles/20210730/k00/00m/040/292000c>。また、江戸時代の平均寿命については、東京都健康長寿医療センターウェブサイト、2022年2月10日検索。<https://www.tmgig.jp/about/hiketsu/2-jidai/>。
- 31) 浅川泰宏、前掲書、58-59頁。
- 32) 四国八十八カ所霊場会ウェブサイト、2022年1月9日検索。  
<https://88shikokuhenro.jp/>。
- 33) 麴町カトリック教会ウェブサイト、2022年1月5日検索。  
<https://www.ignatius.gr.jp/news/preach/202201.html#02>。
- 34) Sanctuary of Our Lady of Lourdes、2022年1月5日検索。  
<https://www.lourdes-france.org/en/>。
- 35) 工藤翔二「100年前のパンデミック “スペイン風邪” の記録」公益財団法人結核予防会機関誌『複十字』No.398、2021年5月、22頁。これは、内務省衛生局『流行性感冒』内務省衛生局、1922年を参照している。
- 36) 国立感染症研究所感染症情報センター、2022年1月9日検索。  
<http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/pandemic/QA02.html>。
- 37) アレクシー・カレル『ルルドへの旅・祈り』春秋社、1983年、190頁。また、Dr.Boissarie著“The Work of Lourdes”（1909年発行）がインターネットアーカイブで公開されており（<https://archive.org/details/TheWorkOfLourdes>）、その中でMarie Baillyについて詳しく書かれている。
- 38) アレクシー・カレル、前掲書、15頁。
- 39) 須沢かおり「ルルド研究序説Ⅳ—キユアから全人的ケアへ」『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所 キリスト教文化研究所年報』40巻、2018年、23頁。
- 40) 須沢かおり、前掲論文、24頁。
- 41) Lourdes United 2020、2021年7月1日検索。  
[https://www.lourdes-france.org/wp-content/uploads/2020/07/affiche-programme-Lourdes—united\\_EN.pdf](https://www.lourdes-france.org/wp-content/uploads/2020/07/affiche-programme-Lourdes—united_EN.pdf)。
- 42) Lourdes United 2021、2021年9月20日検索。  
<https://www.lourdes-france.org/en/lourdes-united-2021/>。
- 43) NHK特設サイト「新型コロナウイルス」、2021年7月15日時点の日本の感染者数は<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>、フランスの感染者数は<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/world-data/>。
- 44) 近藤裕『スピリチュアル・ケアの生き方』地湧社、2004年、18頁。